

冬の天候の見通し

12~2月

気象庁地球環境・海洋部

予報のポイント

- 冬の気温は、寒気の南下が弱いため、全国的に平年並か高いでしょう。
- 冬型の気圧配置は長続きしないため、冬の降雪量は北・東・西日本日本海側で平年並か少なく、冬の降水量は北・東日本日本海側で平年並か少ないでしょう。

冬の天候に影響の大きい北極振動の予想は難しく、現時点では考慮できていませんので、予報には不確定性があります。常に最新の1か月予報等をご覧ください。

冬（12~2月）の平均気温・降水量・降雪量

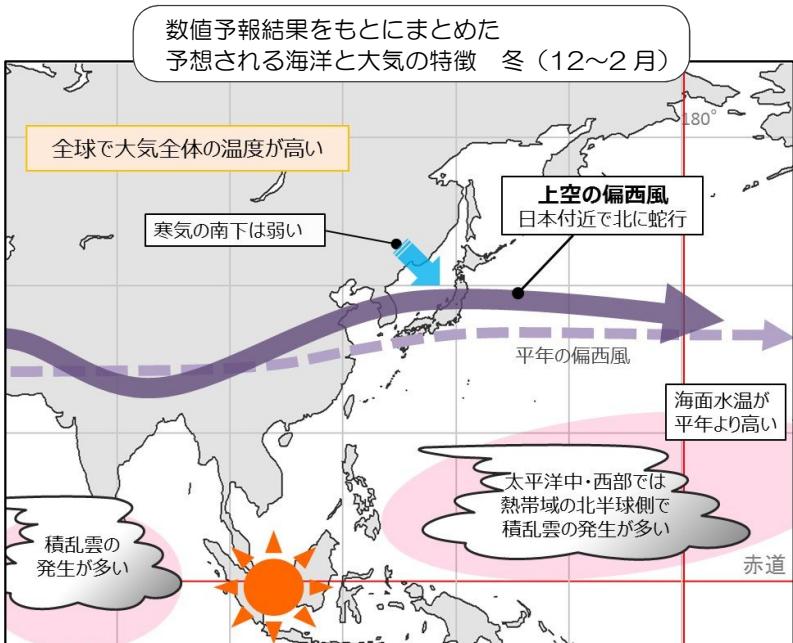
		平均気温 冬（12~2月）	降水量 冬（12~2月）	降雪量 冬（12~2月）
北日本	日本海側	低20並40高40% 平年並か高い 見込み	少40並40多20% 平年並か少ない 見込み	少40並40多20% 平年並か少ない 見込み
	太平洋側		少30並30多40% ほぼ平年並 の見込み	予報しません
東日本	日本海側	低20並40高40% 平年並か高い 見込み	少40並40多20% 平年並か少ない 見込み	少40並40多20% 平年並か少ない 見込み
	太平洋側		少30並30多40% ほぼ平年並 の見込み	予報しません
西日本	日本海側	低20並40高40% 平年並か高い 見込み	少30並40多30% ほぼ平年並 の見込み	少40並40多20% 平年並か少ない 見込み
	太平洋側		少30並30多40% ほぼ平年並 の見込み	予報しません
沖縄・奄美		低20並40高40% 平年並か高い 見込み	少30並40多30% ほぼ平年並 の見込み	予報しません
 数値は予想される出現確率です				

季節予報は、予測の確からしさに応じて、気温や降水量などを「低い（少ない）、平年並、高い（多い）」となる確率で表しています。「平年並」がどの程度の値になるのかについては、末尾の「参考データ（平年並の範囲）」をご覧ください。

確率をその大きさに応じ言葉で解説しています。詳しくは末尾の「参考データ（確率予報の解説）」をご覧ください。

予想される海洋と大気の特徴

- 地球温暖化の影響等により、全球で大気全体の温度が高いでしょう。
- インド洋では、西部を中心に海面水温が平年より高く、積乱雲の発生が多いでしょう。
- 太平洋の中・西部では海面水温が平年より高く、熱帯域の北半球側で積乱雲の発生が多いでしょう。
- 一方、インドネシア付近では、積乱雲の発生が少ないでしょう。
- 上空の偏西風は日本付近では平年より北を流れるため、全国的に寒気の南下は弱いでしょう。
- アリューシャン低気圧の日本付近への影響は弱く、冬型の気圧配置は長続きしない見込みです。



最近10年間の冬の特徴

年	冬の平均気温 平年差°C（階級）				冬の天候の特徴
	北日本	東日本	西日本	沖縄・奄美	
2009/'10	0.4 (O)	0.6 (+)	0.7 (+)	0.4 (+)	全国で気温の変動大 北陸中心に大雪の時期が3回
2010/'11	0.6 (+)	0.2 (O)	-0.4 (-)	-0.8 (-)	12月末～1月末日本海側で大雪、低温
2011/'12	-1.3 (-)	-0.9 (-)	-0.7 (-)	0.0 (O)	冬型多く、北～西日本は3か月連続低温 最近10年間では“平成18年豪雪”に次ぐ積雪
2012/'13	-1.2 (-)	-0.8 (-)	-0.7 (-)	0.4 (+)	北・東・西日本で低温 北日本日本海側を中心に多雪
2013/'14	0.2 (O)	-0.2 (-)	-0.1 (O)	-0.3 (-)	東日本、沖縄・奄美で低温 2月に関東甲信で記録的大雪 日本海側の平地は少雪
2014/'15	0.8 (+)	-0.2 (-)	-0.2 (-)	-0.5 (-)	12月は全国的に強い寒気が流れ込むが、1月以降は少雪
2015/'16	1.0 (+)	1.4 (++)	1.0 (++)	0.6 (+)	冬型の気圧配置が長続きせず、全国的に高温・多雨・少雪
2016/'17	0.5 (+)	0.8 (+)	0.8 (+)	1.1 (++)	日本付近への寒気の南下が弱く、全国的に高温
2017/'18	-0.4 (-)	-0.7 (-)	-1.2 (-)	-0.3 (-)	日本付近へ強い寒気の流れ込むことが多く、全国的に低温
2018/'19	0.4 (O)	1.1 (++)	1.3 (++)	1.8 (++)	東日本以南は寒気の南下が弱く、沖縄・奄美は記録的高温

「2016/17」は2016年12月～2017年2月のことです。

階級 --- :かなり低い - :低い O : 平年並 + :高い ++ :かなり高い

年	冬の降雪量 平年比%（階級）				
	北海道日本海側	東北日本海側	北陸	近畿日本海側	山陰
2009/'10	95 (-)	79 (-)	91 (O)	41 (--)	43 (--)
2010/'11	93 (-)	93 (O)	95 (O)	93 (O)	174 (+)
2011/'12	98 (O)	102 (O)	115 (+)	136 (+)	158 (+)
2012/'13	100 (O)	112 (+)	82 (O)	85 (O)	64 (-)
2013/'14	80 (--)	77 (-)	34 (--)	46 (-)	58 (-)
2014/'15	73 (--)	77 (-)	71 (-)	77 (O)	66 (-)
2015/'16	79 (--)	60 (--)	47 (-)	32 (--)	38 (--)
2016/'17	63 (--)	72 (--)	43 (-)	108 (O)	97 (O)
2017/'18	93 (-)	88 (-)	127 (+)	72 (O)	137 (+)
2018/'19	72 (--)	61 (--)	27 (--)	11 (--)	10 (--)

「2016/17」は2016年12月～2017年2月のことです。

階級 --- :かなり少ない - :少ない O : 平年並 + :多い ++ :かなり多い

参考データ

● 平年並の範囲

		平均気温 冬(12~2月)	降水量 冬(12~2月)	降雪量 冬(12~2月)
北日本	日本海側	平年差: -0.3~+0.4°C	平年比: 93~105%	平年比: 93~104%
	太平洋側		平年比: 80~112%	—
東日本	日本海側	平年差: -0.1~+0.4°C	平年比: 94~104%	平年比: 74~100%
	太平洋側		平年比: 74~124%	—
西日本	日本海側	平年差: -0.1~+0.5°C	平年比: 87~110%	平年比: 66~104%
	太平洋側		平年比: 74~117%	—
沖縄・奄美		平年差: -0.1~+0.2°C	平年比: 85~107%	—

「平年並」の範囲は、同時期の過去 30 年間（1981-2010 年）の値から統計的に求めています。30 年間のデータの中で「高い（多い）」「平年並」「低い（少ない）」となるデータの数が等分になるように「平年並」の範囲を決めています。すなわち、30 年間の 30 個のデータのうち、値が高い（多い）方から 11~20 番目となる 10 個のデータの値の範囲を、およそ「平年並」の範囲としています。

● 晴れ日数と降水日数の平年値

	12月		1月		2月	
	晴れ日数	降水日数	晴れ日数	降水日数	晴れ日数	降水日数
札幌	11.2 日	15.4 日	11.6 日	18.1 日	12.1 日	16.0 日
仙台	18.6 日	4.7 日	19.7 日	5.3 日	19.0 日	5.0 日
新潟	6.2 日	21.7 日	5.1 日	21.5 日	6.6 日	17.3 日
東京	22.5 日	4.2 日	22.9 日	4.5 日	19.1 日	5.5 日
名古屋	21.5 日	5.5 日	21.4 日	5.3 日	19.8 日	6.3 日
大阪	19.4 日	5.5 日	18.3 日	5.6 日	16.2 日	6.3 日
広島	19.5 日	4.9 日	18.1 日	5.7 日	17.2 日	7.0 日
高松	19.0 日	6.2 日	18.6 日	6.5 日	17.0 日	6.9 日
福岡	13.5 日	8.5 日	11.2 日	9.1 日	13.7 日	8.3 日
鹿児島	18.1 日	7.7 日	15.2 日	8.9 日	15.0 日	8.8 日
那覇	13.5 日	8.1 日	10.3 日	10.5 日	9.0 日	10.2 日

「晴れ日数」は「日照時間が可照時間の40%以上」の日数であり、「降水日数」は「日降水量 1 mm以上」の日数です。この2つは同じ日に起こることがあるため、「晴れ日数」と「降水日数」の両方に数えられる日もあります。

● 確率予報の解説（ここでは確率予報を次のような言葉で解説しています）

出現確率 （低い（少ない）：平年並：高い（多い））	解説
高い（多い）確率が 50% 以上 （20 : 40 : 40）	高い（多い）見込み 平年並か高い（多い）見込み
平年並の確率が 50% 以上 （40 : 30 : 30）（30 : 40 : 30）（30 : 30 : 40） （40 : 40 : 20）	平年並の見込み ほぼ平年並の見込み 平年並か低い（少ない）見込み
低い（少ない）確率が 50% 以上	低い（少ない）見込み